

ラウンドテーブル

鄭暎恵、Michael Doyle、蟻塚亮二、石原真衣、権香淑

権：

皆さんの質問を受ける前に、講演者のドイルさんと蟻塚さんに、石原さんのコメントに対するリプライを手短にお願いします。

ドイル：

民族や人々のグループが違う状況のなかでも、それが精神的な症状として現れたということで、たとえばそれが不眠症、トラウマ、不安症とか様々な症状が現れたというお話だったと思います。この先住民族やそのほかの人々が、植民地支配やコロニアリズムを経験して、抑圧され、弾圧され、その結果どうなったのか。結果的に、問題を抱えることになった人たちの治療やケアをどのように行うかについてのお話だったと思います。オーストラリアの文脈では、それぞれの先住民族の文化的要素をどうやって治療法に反映させるのかについて、研究してきました。けれども、日本の場合でしたら、日本の民族や先住民や日本人に適したケアが必要になってきますが、それは日本にいる皆さまが一番よく分かっていると思います。今日は、そのあたりのことについて、聞くことができました。

蟻塚：

沖縄戦を子どものころに体験した高齢者の重度の不眠や身体の痛み、あるいは戦場の場面のフラッシュバックなど、晩年に発症する PTSD を見つけて診療してきました。その後、東日本大震災がおきて、支援する人たちが作った診療所の二代目の所長を引き受けることとなりました。そこでは沖縄の人たちに似た様々なトラウマだけでなく、もっと多彩なトラウマ反応を見ることができました。戦争や原発事故という最悪の人災によって引き起こされた精神的被害について診療してきましたが、今回、鄭暎恵さんの最初の問題提起にもありましたように、マイノリティの問題、あるいは東北の貧困、あるいは沖縄の基地や貧困などについて、植民地主義とトラウマという視点でとらえなおすことの大切さを教えてくださってとても勉強になりました。そういう意味で考えると、医学的でなくて、集团的、社会的な問題としてトラウマを考えていく、ということがこれからいろいろな分野でもっと広がっていくかなあと感じていました。沖縄の子どもたちについて上間陽子さんが本に書いていますけども、16歳くらいで家出して、キャバクラで働いているという少女たちの物語、福島でもあれだけ児童虐待が多くて、自殺率が高くて、子どもたちに既に異変が表れている、そういうものを、早く手当する、トラウマを共有して予防する、そういうことが、これから新しく広がって行けば良いと思っています。以上です。

権：

ありがとうございます。今のお二人のリプライを受けて、石原さん、何かありますでしょうか。

石原：

繰り返しになりますが、ドイルさん、蟻塚さんともに、地域が異なるのですが、トラウマの治癒といったときの文化的な背景を共有するといった共通の課題があると改めて思いました。また、ドイルさんのご発表いただいたオーストラリアの事例と、蟻塚さんが長年沖縄、いまは福島で治療に当たられているとのこと、やはりうらやましいと思うのは、背景が共有されているケアが実践されている点です。今後、様々な地域での課題になると思いました。

権：

質問がたくさん来ているので、いくつか掻い摘んで取り上げます。まずはドイルさんに。オーストラリアで経験されたとされる、依存症以外の具体的なトラウマ関連の症状とはなんでしょうか。また刑務所内の文化的プログラムとはどういうものなのでしょうか、具体的に伺いたいというご質問です。

ドイル：

ありがとうございます。まず、最初の質問なのですが、これについてスピーチのなかで簡単には触れましたが、やはりメンタルヘルスの問題です。メンタルヘルスがあまりよくないというのが一つの世代間のトラウマの症状です。オーストラリアの場合ですと「盗まれた世代」というふうに呼んでいることがあります。ミックスルーツを持つアボリジナルな子どもたちが家族から引き離されて、国家が運営するホームというところに強制的に施設に入れられるという歴史があります。そういう人が大人になって、もしくは既に亡くなられている方もいますが、その次の世代も、また次の子どもの世代も生まれてきていますが、やはり「盗まれた世代」の子ども、そしてその子孫は、メンタルヘルスが大きな問題となっています。アルコール依存症、薬物の使用というのがこのグループのなかには非常に高いということがあります。「盗まれた世代」を超えたその影響がいまも続いているということがあります。コロニアリズムによる健康に対する結果というのはデータに基づいたものとして証明されています。

もう一つの質問である、刑務所のなかの文化的なプログラムについてです。オーストラリアの一部で文化的なプログラムは行われていますが、規模はまだまだ足りないということがあります。ある特定の刑務所では実験的に行われているのですが、必ずしも、全体的に共有されているわけではないので、その点に関しては今後取り組んでいきたいと考えています。例えば、ある刑務所の個人だけが頑張っているから取り組んでいるのではなくて、オーストラリア全体に共有されるような形を作っていきたいと考えています。刑務所内の文化的なプログラムはカナダとニュージーランドの方が、オーストラリアよりも進んでいると言えます。我々も、カナダ、ニュージーランドからたくさん学ばせていただいています。オーストラリアの中では一部

でしか取り組まれていません。

刑務所の文脈で必要なのは、やはり、出所後のサポートです。刑務所の中でプログラムが上手くいっても、出所した時に前の状況に戻ってしまわないように、ちゃんとサポートすることが重要です。刑務所内と出所後のサポートに同時に取り組まないといけないのですが、私自身は現在刑務所内のプログラムについて取り組んでいるところです。お答えになったでしょうか。

権：

そのほか、たくさんの質問が来ています。特に、子どもの連れ去りということに対しての説明をしてほしいという質問が何件も来ています。

ドイル：

国家によってリスクにあると考えられる子どもたちは、家族の元から引き離されるということがあります。少し極端な例を申し上げますと、シングルマザーの家族で母親に薬物、アルコールなどの問題があり、住まいが安定していないような状況で、国家によって子どもが家族の元から引き離され、施設に入れられることがあります。アボリジナルな家庭はこういったケースが、人口の割合として比べた時に非常に多いです。一つ言えるのは、アボリジナルな家庭が他よりも厳しくチェックされるということがあります。常に、見られている。はっきり言って、例えば白人の場合、子どもの扱いに問題があっても、国家はそれを確認もしない、見ない、それほど注目されないものですが、アボリジナルな家庭は国家によって監視の元にあるということが一つ言えます。これは非常に複雑な問題です。私自身の専門分野ではありませんが、オーストラリアの中でもっとも取り組まなければならない問題ではあります。ニュージーランドやカナダでも同じように子どもたちの家族からの連れ去りや引き離しの問題があることははっきりしています。

権：

ありがとうございます。蟻塚さんにもたくさん質問が来ています。その中から、いくつか選定してお伝えしますと、戦後開拓移民は原発が建設されると立ち退きになると思いますが、その後、彼らはどこへ行ったのでしょうかという質問です。どうでしょうか。

蟻塚：

実は、私は戦後開拓の中で生まれました。親父が中国から引き揚げてきて、開拓地に入ってしまった、飯も食えない、学校に弁当を持っていけないという生活だったんですけども、結局、昭和30年代のはじめに、みんな離農していなくなりました。亡くなった早稲田大学の道場親信さんが言っておられましたけれども、戦後開拓というのは国内の余剰労働力を農村に一時的に預けるという形の難民だと。だから、高度成長が始まれば、戦後開拓から労働力として都会に引っ張る、不景気になれば、クビ切る。戦後開拓というのは、そのような余剰労働力のプールなのだという話をしていました。だから戦後開拓の第一世代や第二世代、或いは第三世代は、

都市の労働者として吸収されてあちこちにいるものと思います。

権：

ありがとうございます。鄭さんと、それから石原さんに一つずつ質問が来ています。一つは鄭さんに対してです。反コロニアリズムと似て非なる、脱構築することについて、解説してくださいとのことです。これは大きい質問かもしれませんが、お願いします。そして、石原さんにも先にお伝えいたします。お話の序論の中で、戦時性暴力といった普遍的な考えに対するお考えについて、もう少し伺いたいとのことです。では、鄭さんからお願いします。

鄭：

後で、申し上げるつもりだったのですが、反コロニアリズムと脱コロニアリズム、色んな定義をする方がいらっしゃると思いますが、似ているようでいて、かなり質的には違うものかなと思います。これは私の文脈でいえば、反帝国主義、反コロニアリズムとして、運動を作っていくときに、民族主義に偏りがちな運動になると思うのですが、民族主義というのも、コロニアリズムとは別の意味で大変深刻な問題を含んでいると私は考えています。それで、コロニアリズムに反対するために民族主義に陥ることによる弊害を考えると、反コロニアリズムというふうな単純なものではなくて、脱コロニアリズム（decolonizing）という事の中身を作っていくことが必要ではないかなと思います。そのことを話すとちょっと長くなりますけども、後でまたそのことについては触れたいと思います。

権：

では、石原さんお願いします。

石原：

鄭さんの話が面白いのでそちらで頭がいっぱいなのですが、戦争や性暴力を私のコメントの中で少し触れました。かなりデリケートな話なので、少し歯切れが悪いですが、今回、脱コロニアリズムというテーマが掲げられていますが、そもそも、社会全体の認識において、コロニアリズムが今日行使されていることがまったく理解されていないと思ってきました。とりわけ先住民の問題で理解しましたが、北海道と沖縄というのは今日奪われたままです。先住民というのは独立がすごく難しいマイノリティ集団です。まずコロナイゼーションが、なかなか理解されていないというフラストレーションがあります。これまでの日本におけるコロニアリズムの議論を参照すると、沖縄の場合は沖縄戦と、軍事問題としての基地問題における性暴力の事が出ています。また、植民地朝鮮の問題でいえば、「慰安婦」の問題がこれまでかなり議論されてきたと思います。ただ、私の問題意識と接続して考えると戦争と旧植民地をめぐる問題は両方過去の問題であるという点、また、戦争と性暴力という事は、ある意味で普遍的な暴力であり過ぎて、今日植民地化されたままという先住民の立場からすると、「占領しているのが誰なのか」、「植民地主義を行使しているのは誰なのか」、また「そこから利益を得ているのは誰な

のか」という問題意識が見えなくなってしまうというフラストレーションが凄くあります。戦争と性暴力の問題は相対的に優先度が低いという話では当然なくて、ただ植民地主義をめぐる議論が、誰でも経験しうる普遍的な大きな暴力を介してしか、日本では施行されてこなかったのではないかということを今考えております。そこでは、ひとつひとつの植民地主義における責任の主体が隠れてしまいます。

権：

ありがとうございます。蟻塚さんにまたいくつか質問が来ています。大学で多文化共生論の授業を教えている先生でしょうか。東北の明治維新後の周辺や国内植民地のような歴史、福島原発のことについて、蟻塚さんがお話をくださったように教えるべきなのか、ある程度プログラムを作って計画的にやるべきなのか、ご意見をいただきたいです。ちなみに東北の周辺の明治維新後についてはある程度は触れていますが、原発避難後のことについてはまだまだです。震災を経験していない関西の出身の教員が教える場合、必要なことは何でしょうか。

蟻塚：

東北の明治維新後の国内植民地的な歴史や福島原発のことを是非教えてください。原発事故については、例えばですけど、福島県内でも30キロ以内だから避難しろって、そんな話ありましたよね。その避難指示区域と避難指示されない区域が、福島県内で原発事故が起きた時、分かれました。これは全く医学的根拠のない政治的な判断です。放射能の被害であれば、福島県全体が被害者です。あるいは茨城県とか、宮城県含めて放射能の被爆者です。そういう目で考えて、避難指示区域というのはそういう政治的な設定をまさに原発がもたらします。原発というのは人と人との分離させる、分断する。そういうことがあるので、関西にいる人たちも全然自分たちと関係ないことではない。若狭湾にいっぱい原発ありますからね。そんなことで、自分の周りのことについて考えていただければ良いかなというふうに思いました。

権：

ドイルさんへの質問です。世代間トラウマにはジェンダーによる違いはありますか。もしあれば、どのように異なるか、介入方法の違いを知りたいということです。いかがでしょうか。

ドイル：

質問いただきありがとうございます。全部話すと長くなってしまうので、少し掻い摘んでお答えします。アボリジナルな女性はアボリジナルな男性よりも、健康状態がそんなに悪くなくなったりします。やはり、背景をみると若い男性が問題を抱えていることがあります。なので、ジェンダーの違いはあります。コロナイゼーションの影響は男女によって受け方が違います。アボリジナルな男性の方が、被害を受けてアイデンティティを構築することに苦労したと思います。新しい西洋の経済、文化の中で、アボリジナルな男性は自分たちのアイデンティティを構築することがより困難でした。仕事などに関して、女性の方がもう少し、安易に適応できた。

決して楽だったと言っているわけではありませんが、確かに男女の違いはあります。

あまり、治療法の違いについては深く考えたことはありません。けれども、刑務所の文脈の中でいいますと、やはり大半は男性が多いです。刑務所の人口に関しては、9割くらいが男性です。日本でも同じようなことがあるかなと思います。やはり犯罪の内容も違います。たくさんの小さな罪、例えば家計を支えるために食べ物を盗むという軽い犯罪を女性の方が起こすということが多く、男性は深刻な犯罪を起こす傾向があります。そうすると、男女に対する治療法も違うと思います。性暴力の問題についても少し話がありましたけれども、刑務所に入っている女性は全員といってもいいほど、性暴力の被害を受けていると言い切ることが出来ると思います。男性も性暴力の被害を受けています。ただ、男性の方がそれを認めないということがあります。確かに、男女では違う対応が必要ですね。ごめんなさい、あまりちゃんとした答えになっていないと思いますが、非常にいい質問です。刑務所のプログラムについて有効な質問ありがとうございました。

権：

たくさんの質問をさばききれない状況ですが、時間が来てしまいましたので、残念ですが、最後に一言ずつ、メッセージをいただいてもよろしいでしょうか。石原さん、蟻塚さん、ドイルさん、鄭さんの順でお願いします。

石原：

はい、ありがとうございました。奪われた健康と損なわれた身体から植民地主義を照らすという事が、日本では今始まった議論だと思っています。そのような国際シンポジウムに立ち会えて非常に光栄なことでした。ありがとうございました。

蟻塚：

日本の社会では、戦争被害などの巨大なトラウマをずっと持っていて、その色んな跳ね返しの中で、DVとか虐待とか不登校とかいろんな問題が起きているわけで、そういう意味で日本の社会をもう一回見直してほしいなというふうに思いました。

ドイル：

シドニー大学からの観点でお答えします。シドニー大学では植民地主義、コロナイゼーションに関するあんまり気持ちよくない議論、したくないかもしれない議論をしてきたことによって、大学としてよりよくなった、成長してきたということが言えると思います。まだまだ努力は必要ですけども、先住民の文化を大学に取り込むことで、大学は成長したと私は思っています。

鄭：

今日、ドイルさんがデータを示して実証してくれたように、コロニアリズムは心身の健康を

奪っていきます。よって、「コロニアリズムによる心の傷を癒やすには、社会構造を正す Justice が不可欠」だということに、おそらく多くの皆さんが賛同してくれるかもしれませんが、しかし、問いはその先にもまだまだ続きます。では、この社会で何が justice と equity であるかの合意をいかにして形成し、それをどう構築していくのか、という問いです。

今日の議論に出てきたように、コロニアリズムと言っても、地域や時代、はたまた政治的な位置によって、共通点もあれば、様々な違いもあり、かつ重層化しています。答えは、その多様な影響を、調査し把握して、向き合うことから始まります。

大きな声だけではなく、「東北へのコロニアリズム」といった、これまで「聞き取られにくかった声」も聞き取られるようになることが大切です。癒やしのプロセスを進めていくには、被害者・加害者という二項対立的な関係に陥ることがあっても、そこに留まらずにコミュニケーションを続けていく必要があります。被害者としての心の傷を癒やすには、加害者側の心の傷も癒やされていくための何かが連動していくことが不可欠だと思えるからです。

例えば、アジアへのコロニアリズムにおいて、被害者の心の傷を癒やすには、民族主義だけをもって解決できないことがあります。「決して忘れることはできない。それでも、赦すことはできる」という境地に至ることが、癒やしにつながる一步になるはずですが。歴史的な集団的トラウマを癒やすには、誠意ある個人的な謝罪から始まり、加害者側社会として法的措置をとるという公式陳謝が実現できることが望ましい一方、被害者側集団から赦され、お互いに人間としての尊厳を認め合うことができれば、加害者側の集団トラウマも癒やしのプロセスに入ることが可能になるでしょう。そのためには、被害者と加害者の双方ともが歴史を隠蔽して見ることを避けるのではなく、歴史と向き合い事実を受け入れることこそが重要です。

コロニアリズムを批判するためとはいえ民族主義に陥ると、結果としては反目と対立を深めることになります。癒やしのプロセスからは外れ、さらに分断支配される状況を深めてしまい、皮肉にも、頂点で支配する権力に有利な構造を強化しかねません。そこで、私たちが特に傾聴すべきなのは、マルチレイシャル／ミックスレイシャルな視点からの「声なき声」です。政治的に対立させられがちな二つ以上の立ち位置にまたがる視点は、民族主義的な反コロニアリズムではなく、社会構造を decolonizing していく力になるはずなのです。国籍や民族のいかんを問わず、コロニアリズムに多くを奪われてきた者たちがつながれる、連帯できる途を見つけることが鍵となるでしょう。

そのために、「日本人」も、自分自身の内にある「声がなくとも、まぎれもなくそこに存在する苦しみ」を聞き取れるようになり、その苦しみがどこからくるものなのかを見きわめることが大切だと思います。

権：

ご登壇の皆さま、貴重なお話、ありがとうございました。終了の時刻となってしまいました。本シンポジウムをきっかけに、植民地主義と社会正義をめぐるより深い議論がいま、この場から始まることを願ってやみません。登壇者の皆さん、そして同時通訳を担当されたメリ・ジョイスさん、大村祐子さんにも、盛大な拍手をお願いします。

以上を持ちまして、国際シンポジウム「コロニアリズムが奪う心身の健康」を終了いたします。ありがとうございました。アンケートのご協力をお願いします。お帰りの際は、同時通訳の機器を必ず受付に返却してくださいますようお願い申し上げます。皆さんお疲れ様でした。